

「実践演習」の効果の検討に向けて：履修学生のキャリア構築スキルの特徴

The effectiveness of "Service Learning" : Characteristics of skills building toward career development

高木 邦子

文化政策学部 国際文化学科

Kuniko TAKAGI

Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、本学で今年度開講した「実践演習」科目群に含まれる「地域連携実践演習」と「テーマリサーチ・プロジェクト」の学習効果を検討する縦断的調査の第一報である。学習効果の指標にはキャリア構築の機会活用スキル(6 Skills for Careers)を用い、4月の新入生ガイダンスで調査を実施して今後の変化量検討のベースラインとなる値を得た。また、これらの実践演習科目に登録した学生としなかった学生の機会活用スキルを比較したところ、地域連携実践演習にエントリーした学生は、エントリーしなかった学生よりも元々一部のスキルが高いことが示された。一方、テーマリサーチ・プロジェクトの履修者は、履修しなかった者との間にスキルの差は認められなかった。

This paper is the first report of a longitudinal study that confirms the educational effects of a new class grouping called "Service Learning," which includes subjects entitled "Community Service-learning" and "Themed Research Project." A baseline measure was established by having incoming freshman students complete the 6SC (6 Skills for Career), a skills assessment index. Results showed that students who registered for the "Community Service-learning" course had more skills when compared with students who did not register for the course. In contrast, students who registered for the "Themed Research Project" course had no difference in skills when compared with students who did not register for the course.

1. はじめに

1.1. 大学に期待される“社会で必要な力”の育成

グローバル化やIT社会の進展、雇用のありかたの変化といった社会の変化に伴い、大学教育には社会人として生きる為に必要な力の育成を求める機運が高まっている。2011年の大学設置基準の改正により大学には職業的自立に向けた指導体制の整備が求められ、現在の大学が専門性や幅広い教養を持つ人材だけでなく、“社会人に必要な力”を持つ人材の育成もまた担うことが明確になった。

では、“社会人に必要な力”とは具体的にどのようなものであろうか。近年指摘されている代表的な概念と分類をTable 1に示す。

社会人基礎力 2006年に提唱された「社会人基礎力」は、職場や地域社会で求められる能力と定義され、人間性や基本的な生活習慣を土台に、基礎学力と専門知識の相互作用の中で育てられるものとされる（経済産業省、2006）。社会人基礎力が注目された背景には“若者が社会に出るまでに身に付ける能力”と“職場等で求められる能力”のミスマッチがあった。そしてこの“職場等で求める能力”、すなわち社会人基礎力を学生時代に身に付けるために、若者・教育界・産業界の連携が必要であることが指摘された。

21世紀型スキル 社会人・職業人としての力の育成を重視する動きは世界的にも見られる。2009年にシスコシステムズ、インテル、マイクロソフトといった企業がスポンサーとなり立ちあがった「21世紀型スキルの学びと評価プロジェクト (Assessment and Teaching of Twenty-First Century Skills Project : ATC21S)」は、世界の諸機関が提案している社会で求められるスキルを包括的にまとめ、4カテゴリー12のスキルを提案した。グリフィン、ケアとマクゴー (2014) によれば、このプ

ロジェクトの背景にもまた、“新入社員が労働力としてのスキルを持ち合わせていない”という会社経営者の不満があったという。ATC21Sはさらに、学校教育を通じた各スキルの向上の為にスキル評価の枠組みを提案している。

学士力 大学教育に向けたものでは、2008年に提唱された「学士力」(文部科学省中央教育審議会, 2008) が挙げられよう。学士力は大学教育の質保障の支柱として提案されたが、専門性を含む「知識・理解」のほか、「汎用的技能」や「態度・志向性」、「総合的な学習経験と創造的思考力」という知的活動のほか、職業生活や社会生活でも必要とされる能力が含まれている。

キャリア教育の視点から 2011年には、幼児期の教育から大学を含む高等教育に至るまで体系的にキャリア教育を進める方針が示された(文部科学省中央教育審議会, 2011)。キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てる事を通してキャリア発達を促す教育」であり、単に就きたい職業の選択や、特定の技術や知識の向上のみを目指すものではない。この答申で示された「社会的・職業的自立や社会・職業への円滑な移行に必要な力」(Table 1参照)にも、専門性だけでなく社会人として必要な普遍的能力が挙げられている。特に「基礎的・汎用的能力」は、さらに「人間関係形成・社会形成能力」「自己理解・自己管理能力」「課題対応能力」「キャリアプランニング能力」に分類され、教育活動の具体的指針を示している。

ジェネリックスキル 以上の“社会で必要な力”をまとめると、専門性に加えて思考力や課題解決力、対人関係の能力など、育成すべき事柄があることはぼんやりと見えるが、包括的概念の構築には至っていない。分類自体の妥当性を問う声や評価法の整備を求める声もあり(岩井, 2010など)、教育実践においてもその評価にはいまだ苦勞がみら

Table 1 大学教育に育成が期待される「社会で必要な力」(ジェネリックスキル)

	大分類/分野	具体的能力/スキル
経済産業省 社会人基礎力に関する研究会 (2006) 中間とりまとめ より 「社会人基礎力」 ※人間性・基本的な生活習慣を土台に、基礎学力と専門知識の相互作用の中で育つ	前にも踏み出す力 (アクション)	主体性 : 物事に進んで取り組む力 働きかけ力 : 他人に働きかけ巻き込む力 実行力 : 目的を設定し確実に行動する力
	考え抜く力 (シンキング)	課題発見力 : 現状を分析し目的や課題を明らかにする力 計画力 : 課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力 創造力 : 新しい価値を生み出す力
	チームで働く力 (チームワーク)	発信力 : 自分の意見をわかりやすく伝える力 傾聴力 : 相手の意見を丁寧に聴く力 柔軟性 : 意見の食い違いや立場の違いを理解する力 状況把握力 : 自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力 規律性 : 社会のルールや人との約束を守る力 ストレスコントロール力 : ストレスの発生源に対応する力
ATC21S 「21世紀型スキル」 (Griffin, Care, & MmcGaw, 2012)	思考の方法	創造性とイノベーション 批判的思考、問題解決、意思決定 学び方の学習、メタ認知
	働く方法	コミュニケーション コラボレーション (チームワーク)
	働くためのツール	情報リテラシー (ソース、証拠、バイアスに関する研究も含む) ICTリテラシー
	世界の中で生きる	地域とグローバルのよい市民であること (シチズンシップ) 人生とキャリア発達 個人の責任と社会的責任 (異文化理解と異文化適応能力を含む)
中央教育審議会 (2008) 学士課程の構築に向けて (審議のまとめ) より 「学士力」	知識・理解	多文化・異文化に関する知識の理解 人類の文化、社会と自然に関する知識の理解
	汎用的技能	コミュニケーション・スキル 数量的スキル 情報リテラシー 論理的思考力 問題解決力
	態度・志向性	自己管理能力 チームワーク、リーダーシップ 倫理観 市民としての社会的責任 生涯学習力
	総合的な学習経験と創造的思考力	獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する力
	基礎的・基本的な知識・技能	
中央教育審議会 (2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について より 「社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力」	基礎的・汎用的能力	人間関係形成・社会形成能力 自己理解・自己管理能力 課題対応能力 キャリアプランニング能力
	論理的思考力、創造性	
	意欲・態度及び価値観	
	専門的な知識・技能	

れる。だがいずれにせよ、大学が必ずしも特定の専門職に就く人材を養成する機関ばかりではないことを踏まえると、専門性の育成以外に、どのような仕事に就いても役立つ“社会で必要な力”を育てることは大学教育の現実的な教育目標となり得る。これらの多様な汎用的能力を総称して吉野 (2007) はジェネリックスキル (generic skills) と呼んでいる。吉野によれば、言葉の意味するところは国により異なり測定指標も多様とのことだが、本稿ではこれにない大学生が社会で、また職業人として生き抜くために必要な力を総称して以下「ジェネリックスキル」と呼ぶこととする。

1.2. ジェネリックスキルをどのように育成するか

では、大学教育の中でジェネリックスキルをいかに育てることができるだろうか。従来の講義の中でジェネリックスキル活用を想定した運営が試みられている一方で、ジェネリックスキルの向上それ自体を教育目標とした授業実践も多い。そのひとつが、ボランティアやインターンシップ、部活やアルバイトのように、学生が大学外または正課外で行う実践的活動や体験であり (岩井, 2010; 山本, 2010など)、もうひとつがPBL (Problem-Based Learning) のように問題解決を想定した大学での授業や演習である (加納・岡野・河合・手嶋, 2014など)。両

者の比較から、実践的活動と演習科目では効果を及ぼす側面が異なり、相互補完的にスキルが高められることが示されている（加納ら, 2014；山田・森, 2010）。また、実践と授業での学習を双方向に結び付けるダイナミクスを示し、実践経験の「ふりかえり」による学びの深まりを促す取り組みや（河井, 2012）、「正課」「正課外」の中間の位置づけとして、単位は付与されないが大学が戦略的に用意した「準正課科目」を設けた取り組みの例もある（河合塾, 2011）。

本研究では、学生がジェネリックスキルを身につけることを教育目標とした本学の新設科目群「実践演習」の教育効果を検討する。この科目群は、実務型の人材育成を教育目標に掲げる本学においてはカリキュラム上重要な位置にある。学外等での実践的活動にあたる科目と大学での演習科目が含まれており、受講者のジェネリックスキルの向上に各側面からの寄与が期待される。以下に本学の「実践演習」について説明する。

1.3. 本学新科目群「実践演習」

今年度（平成27年度）から本学カリキュラムに設けられた科目群「実践演習」は、上に述べたとおり社会人に必要な能力、すなわちジェネリックスキルの獲得・向上を目標とした科目区分である。学生には卒業要件として「実践演習」の科目区分から1単位以上の履修が求められる。実践演習には、(1) テーマリサーチプロジェクト（地域の課題、社会的な課題、日常的な課題、先端的な課題等に対して実践的な企画・立案・プレゼンテーションを集中講義の演習で学ぶ）、(2) 地域連携実践演習（行政、企業、学校、NPO等の現場での体験を通して、現実社会と関わりながら地域課題への理解を深める）、そして(3) テーマ実践演習（地域連携促進、多文化共生、文化・芸術振興支援及びユニバーサルデザイン等の広範な領域においてリサーチを踏まえて現場で主体的に実践し提案する）という各1単位の3科目が含まれる。各科目は「A」「B」として2度ずつ履修が可能であり、テーマの一貫性は必ずしも問わないため、同じ活動に継続して関わることも、異なる活動に参加することもできる。

今年度前期にはこれらの科目のうち「地域連携実践演習」と「テーマリサーチプロジェクト」がそれぞれ開講された。「地域連携実践演習」は実践的活動、「テーマリサーチプロジェクト」は大学での演習が活動の主体である。「地域連携実践演習」では117名の学生が35のプログラムにエントリーし、「テーマリサーチプロジェクト」は131名の学生が4クラスに分かれて履修した。

1.4 教育効果の指標：キャリア構築の機会活用スキル

実践演習のジェネリックスキルに及ぼす効果を示す指標として、本研究ではキャリア構築のための機会活用スキルに注目する。

Mitchell, Levin, & Krumboltz, (1999) は、キャリア発達が目標を定めて直線的に進むものではなく、様々な変化が生じる人生において、その時その時の状況に応じてキャリアを構築していくというPlanned Happenstance理論を提唱した。そして、キャリア構築に有効なスキルとして(1) Curiosity (好奇心)、(2) Persistence (持続性)、(3) Flexibility (柔軟性)、(4) Optimism (楽観性)、(5) Risk Taking (冒険心) を挙げている。これらのスキルは人生の変化の中で遭遇する様々な出来事の中で、キャリア構築につながりそうなチャンスを確認する、またはそうしたチャンスを作り出し、活かす、といった形でキャリア構築に貢献するものと考えられる。

この理論を参考に高綱・浦上・杉本・矢崎(2014)は「キャリア形成につながるかもしれない機会を認識したり、そのような機会を積極的につくりだしたりするためのスキル」の測定尺度、6SC (6 Skills scale for Career) を作成した。6SCはPlanned Happenstance理論を踏まえて日本独自の概念を加え、「興味探索スキル」「継続スキル」「変化スキル」「楽観的認識スキル」「始動スキル」「人間関係スキル」の6側面からキャリア構築の機会活用スキルを測定するものである（項目はAppendix参照）。

Table 1に挙げた様々なジェネリックスキルの中にはキャリアの構築に関するもの（「人生とキャリア発達」「キャリアプランニング能力」など）が含まれており、6SCの各スキルと類似した項目も散見される。また、これらのスキルがPlanned Happenstance理論で述べられるようにキャリア構築に影響するものならば、機会活用スキルは具体的な能力やスキルに先行して存在するものと見なせよう。以上から、本研究ではキャリア構築の機会活用スキルをジェネリックスキルの基礎と位置づけ、実践演習科目の教育的効果の指標とする。

2. 本調査の目的

実践演習科目の受講が学生に及ぼす教育的効果を検討するため、縦断的調査を実施する。本稿では、大学入学直後の1年生を対象にキャリア構築の機会活用スキル（以下、「機会活用スキル」とする）を測定し、今後の追跡調査結果と比較する為の基準得点を得ることを第一の目的とする。

また、キャリア構築に影響するという機会活用スキルの特性上、実践演習科目に登録する学生が、そもそも高いスキルを持っている可能性もある。そこで、「地域連携実践演習」と「テーマリサーチプロジェクト」の登録の有無によるスキル得点の比較や、登録科目数によるスキル得点の比較を行うことを第二の目的とする。

注

¹ 地域連携実践演習は、半期または通年で定められた時間数の現場体験を行うことで次学期に履修登録する権利が発生するため、活動中は「エントリー」と表現される。一方、テーマリサーチプロジェクトは履修登録を行うため「履修」と表現される。本稿では、地域連携実践演習の「エントリー」と、テーマリサーチプロジェクトの「履修」をまとめた場合は「登録」という表現を用いる。

3. 方法

3.1. 質問紙調査

2015年4月11日に行われた新入生ガイダンスで質問紙調査を実施した。全新生を対としたのは、実践演習の履修学生と履修しなかった学生との間で比較する為である。ガイダンスの最後に調査用紙を配布して調査者が研究の趣旨を説明し、協力が任意である旨、また学籍番号の記入を求めるが履修情報や今後の調査データとのマッチングの目的のみに使用する旨を周知したうえで協力を依頼した。回答後の質問紙は会場出口の箱で回収した。結果、全新生359名のうち、回収された質問紙は348名分(96.9%)、このうち記入上の不備があったものを除き、最終的な有効データは339名分(94.4%)となった。

調査用紙は、フェイスシートと学籍番号記入欄、そして高綱ら(2014)による機会活用スキルの測定尺度である6SCβ版により構成された。6SCは6つのスキルについて各5項目、合計30項目から構成され、各項目について「うまくやれないと思う(1)」から「うまくやれると思う(7)」の7段階で評定を求めるものであった。

3.2. 履修情報との連結

実践演習科目への登録状況と機会活用スキルの特徴を検討する為に、実践演習専門部会の許可を得て地域連携実践演習の各プログラムへのエントリー学生、およびテーマリサーチプロジェクトの履修学生の情報を得た。質問紙に記入を求めた学籍番号により両科目の登録状況と質問紙の回答データを連結した。

4. 結果

4.1. 尺度得点の算出

高綱ら(2014)を踏襲して6つのスキルの平均値、標

Table2 6SCの各尺度の得点分布と信頼性係数

尺度名	<i>n</i>	<i>Mean</i>	<i>SD</i>	<i>α</i>
興味探索スキル	346	4.84	.93	.79
継続スキル	346	4.56	1.04	.84
変化スキル	347	4.59	.88	.79
楽観的認識スキル	345	4.69	1.06	.86
開始スキル	346	4.80	1.05	.85
人間関係スキル	345	4.30	1.25	.86

注) 項目数で除した値。

準偏差、およびα係数を算出した結果をTable2に示す。信頼性係数であるα係数は.79~.86の値を示しており、高綱ら(2014)の結果と同様、いずれのスキル項目も尺度の内的整合性は高いと判断した。なお、各得点について性差を検討したところ、「楽観的認識スキル」で男性が高得点の傾向($t(334) = 1.88, p < .10$)が認められたが、それ以外の尺度では性差は示されなかった。

次に、所属学部学科間での6CSの各得点を比較するために、「デザイン学部」および文化政策学部の3学部である「国際文化学科」、「文化政策学科」、「芸術文化学科」の4群間での一元配置分散分析を実施した(Table3)。「開始スキル」のみ所属学部および学科間の得点差が5%水準で有意であり($F(3,333) = 2.76, p < .05$)、多重比較(Tukey HSD)の結果からは、「開始スキル」が文化政策学科よりもデザイン学部で有意に高く($p < .05$)、また文化政策学科よりも芸術文化学科で高い傾向が示された($p < .10$)。国際文化学科は特に他学部および他学科と有意な差は認められなかった。

以上のように、調査協力者の属性によるスキル得点の差が一部で示されたが、本研究では高綱ら(2014)にならひ、性や所属学部学科等で分けることなく以降の分析を行った。

Table3 学部学科間での6SC得点の比較

	<i>n</i>	文化政策学部			デザイン学部	<i>F</i>	<i>df</i>	多重比較
		国際文化学科	文化政策学科	芸術文化学科				
興味探索スキル		115	59	54	109	1.74	3	
	<i>Mean</i>	4.81	4.67	5.06	4.84			333 <i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	.85	.94	.94	1.00			
継続スキル		115	59	56	107	.18	3	
	<i>Mean</i>	4.57	4.51	4.63	4.52			333 <i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	1.00	1.00	1.16	1.06			
変化スキル		115	58	56	109	1.23	3	
	<i>Mean</i>	4.6	4.40	4.56	4.67			334 <i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	.81	.86	.93	.91			
楽観的認識スキル		114	59	55	108	.38	3	
	<i>Mean</i>	4.71	4.56	4.64	4.73			332 <i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	.99	1.04	1.08	1.16			
開始スキル		115	58	56	108	2.76	3	文化政策<デザイン * 文化政策<芸術文化 †
	<i>Mean</i>	4.75	4.49	4.95	4.93			333 $p < .05$
	<i>SD</i>	.95	1.07	1.08	1.12			
人間関係スキル		114	59	56	107	.78	3	
	<i>Mean</i>	4.31	4.16	4.49	4.23			332 <i>n.s.</i>
	<i>SD</i>	1.16	1.25	1.16	1.40			

*: $p < .05$, †: $p < .10$

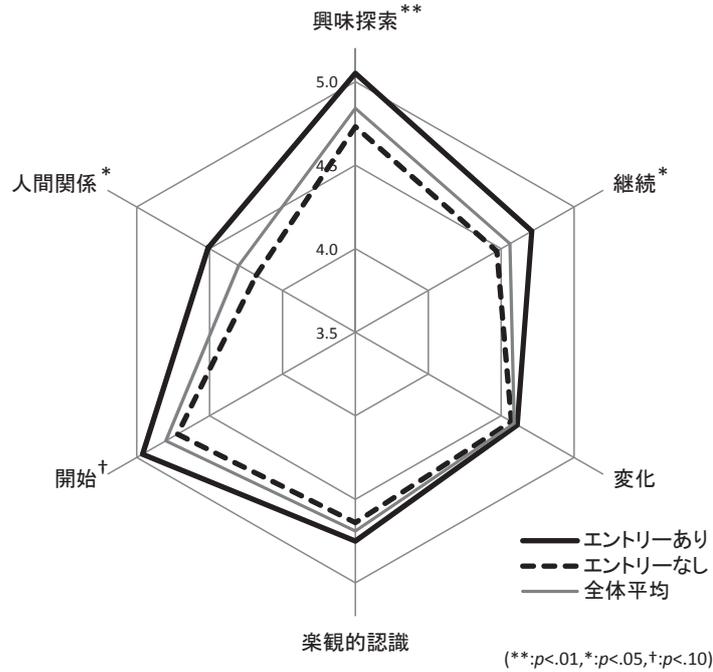


Figure1 地域連携実践演習のエントリー状況による6SCの平均得点比較

Table4 地域連携実践演習のエントリー状況による6SCの平均得点比較

	エントリー	n	平均値	標準偏差	F	t	p
興味探索スキル	あり	113	5.05	.90	.03	2.95	**
	なし	224	4.73	.93			
継続スキル	あり	114	4.71	.94	2.14	2.08	*
	なし	223	4.47	1.08			
変化スキル	あり	114	4.61	.76	3.07	.38	n.s.
	なし	224	4.57	.93			
楽観的認識スキル	あり	114	4.75	1.07	.12	.86	n.s.
	なし	222	4.64	1.07			
開始スキル	あり	113	4.96	1.06	.12	1.97	†
	なし	224	4.72	1.05			
人間関係スキル	あり	113	4.51	1.19	.36	2.32	*
	なし	223	4.18	1.28			

**: $p < .01$, *: $p < .05$, †: $p < .10$

4.2. 地域連携実践演習登録者の機会活用スキルの特徴

地域連携実践演習にエントリーした学生117名とエントリーしなかった学生242名の各スキル得点をFigure1に、*t*検定の結果をTable4に示す。地域連携実践演習にエントリーした学生は、エントリーしなかった学生よりも「興味探索スキル」($t(231.37) = 2.98, p < .01$)、「継続スキル」($t(335) = 2.08, p < .05$)、「人間関係スキル」($t(334) = 2.32, p < .05$)が有意に高いことが示された。加えて「開始スキル」が有意傾向に高い($t(335) = 1.97, p < .10$)という結果も得られた。

4.3. テーマリサーチプロジェクト登録者の機会活用スキルの特徴

テーマリサーチプロジェクトについても地域連携実践演習と同様に、履修した学生131名と履修しなかった学生228名の各スキル得点の平均値を比較した。各スキル得点をFigure2に、*t*検定の結果をTable5に示す。この結果では、テーマリサーチプロジェクトを履修している学生と履修していない学生とでは、いずれのスキル得点についても有意な差は認められなかった。

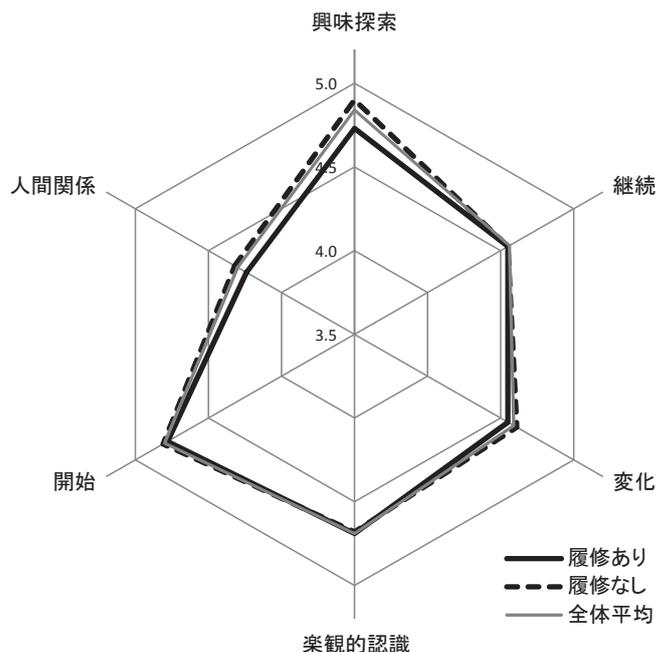


Figure2 テーマリサーチプロジェクトの履修状況による6SCの平均得点比較

Table5 テーマリサーチプロジェクト履修状況による6SCの平均得点比較

	履修	n	平均値	標準偏差	F	t	p
興味探索スキル	あり	126	4.73	.94	.04	1.61	n.s.
	なし	211	4.90	.93			
継続スキル	あり	126	4.55	1.08	.52	.01	n.s.
	なし	211	4.55	1.02			
変化スキル	あり	126	4.55	.85	.00	.61	n.s.
	なし	212	4.61	.89			
楽観的認識スキル	あり	124	4.69	1.04	.76	.10	n.s.
	なし	212	4.68	1.09			
開始スキル	あり	126	4.78	1.07	.02	.24	n.s.
	なし	211	4.81	1.05			
人間関係スキル	あり	126	4.24	1.25	.10	.61	n.s.
	なし	210	4.32	1.26			

4.4. 地域連携実践演習とテーマリサーチプロジェクトの登録と機会活用スキル

地域連携実践演習とテーマリサーチプロジェクトの登録は重複可能であるため、Table6に示すように両科目に登録した者、どちらか一方の科目のみに登録した者、両科目とも登録しなかった者が居た。人数の偏りについての χ^2 検定の結果は1%水準で有意であり、地域連携実践演習とテーマ実践演習のどちらか一方に参加する学生が、両者に参加する学生、両授業とも参加しない学生よりも多かった ($\chi^2(1) = 41.96, p < .01$)。また、6SCの各スキル得点について地域連携実践演習のエントリーの有無 (2) × テーマリサーチプロジェクト履修の有無 (2) の分散分析を実施した結果、交互作用は有意ではなく、「興味探索スキル」でのみ地域連携実践演習エントリーの主効果が認められた ($F(3,1) = 4.29, p < .05$)。この結果は、地域連携実践演習とテーマリサーチプロジェクトの両科目に登

録した学生が一科目のみ登録した学生より特徴的にスキルが高いわけではなく、登録科目数よりもむしろ、地域連携実践演習にエントリーした学生の「興味探索スキル」が高いという特徴を示すものであった (Figure3参照)。

Table6 地域連携実践演習のエントリーとテーマリサーチプロジェクトの履修のクロス表

		テーマリサーチプロジェクト履修		合計
		あり	なし	
地域連携実践演習 エントリー	あり	15	102	117
	なし	116	126	242
	合計	131	228	359

($\chi^2(1) = 41.96, p < .01$)

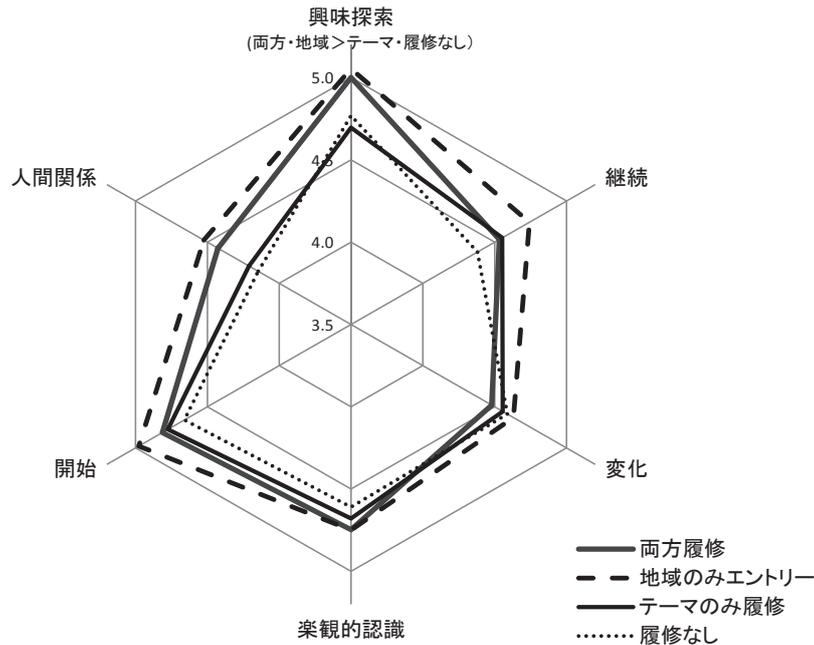


Figure3 地域連携実践演習・テーマリサーチプロジェクトの登録状況と6SC得点

5. 考察・今後の研究計画

本研究の第一の目的は、新設科目群「実践演習」の教育的効果検討の事前調査として、当該科目受講前の学生の機会活用スキル得点を得ることであった。有効回答が入学者の94.4%と、今後の縦断的調査に繋がるデータを多く得る事ができた。一部の尺度得点で所属学部学科による差が示されたことから、以後今回のデータと比較しながらスキルの変化を縦断的に調査するが、所属学部学科間の違いも念頭に置き分析を進めたい。

第二の目的は、当該科目に登録する学生の機会活用スキルの特徴を明らかにすることであった。結果、地域連携実践演習のエントリーをした学生は、エントリーしなかった学生と比べるとそもそも「興味探索スキル」と「継続スキル」、「人間関係スキル」が高いことが示されたが、テーマリサーチプロジェクトの履修学生と履修しなかった学生との間には得点差は認められなかった。地域連携実践演習は学生が大学外に出てゆく実践型の演習であり、プログラムの必要に応じて時間をつくらねばならないため積極性や行動力が求められると推測できる。一方、テーマリサーチプロジェクトは大学内での演習授業、しかも集中講義で行われることから、移動の労力や学外者と接する経験はなく、また費やす時間も限定されている。そのため、前者は機会活用スキルの高い者が登録する傾向にあったが、後者はスキルよりも移動や時間の都合から登録した学生が多かった為に、登録の有無によるスキル得点の差が見られなかったのかもしれない。

登録科目数との関係では、2科目に登録した学生のスキルが他より顕著に高いとはいえず、登録科目数よりも、地域連携実践演習にエントリーした学生の「興味探索スキル」の高さが示されるにとどまった。しかし、好奇心と活動性は多様な経験を招き、結果として多くのことの学習に至る

とされる（稲垣・波多野, 1989）。複数科目への登録が好奇心や活動性と関連するならば、将来的にスキル向上と関係するかもしれない。また実践的活動と大学内の演習科目での学びはそれぞれがジェネリックスキルの向上に寄与するという指摘（加納ら, 2014；山田・森, 2010）から、実践活動と演習授業の2科目で学んだ学生のスキル変化の側面には特徴がみられるかもしれない。以上から、登録科目数による学生の変化については今後も継続して注目したい。

ところで、高綱（2015）は高校生を対象にした検討から、キャリア発達が必要しも直線的に進むものではないことを指摘している。ジェネリックスキルもまた教育課程を経ることで順調に身につくとは限らないであろう。“社会で必要な力”は、大学の特定の授業のみで育成され得るものではない。他の授業での経験や正課外の活動、友人関係、アルバイトやボランティアの経験など多くの要因が影響していることが予想される。このように考えると、ジェネリックスキルの育成に対する大学教育の限界が指摘されるかもしれない。

だが、社会で必要なさまざまな能力やスキルは、それぞれ個別に存在するわけではなく、ある能力が高められることが別の能力を高める経験に繋がる、というように相互に関連している可能性がある。そうであれば、大学の授業が学生にきっかけを提供し、その後の成長に寄与することは十分考えられる。

今後の研究では、実践演習の教育効果を中核に学生のジェネリックスキルの様相とその影響要因を縦断的に調査し報告していく。まずは本論で得た機会活用スキルについて科目受講後の変化の検討を行う。さらに、学生からの授業を通じた変化についての自己報告や、今後の科目登録や正課外の活動への参加状況等との関係も検討予定である。これら一連の研究を通して、学生にジェネリックスキルを

涵養するために大学が提供できる授業や体験活動、環境構築へのヒントを見出してゆきたい。

謝辞

本調査を実施するにあたりご協力を賜りました実践演習専門部会および科目担当の先生方、また、調査に協力して頂いた回答者の皆さまに感謝いたします。

引用文献

- Binkley, M., Erstad, O., Herman, J., Raizen, S., Ripley, M., Miller-Ricci, M., & Rumble, M. (2012). Defining Twenty-First Century Skills. In P.Griffin, B.McGaw, & E.Care(Eds), *Assessment and Teaching of 21st Century Skills*, Dordrecht, Springer.,pp.17-66. (21世紀型スキルを定義する ピンクレー M., アースタッド O., ハーマン J., ライゼン S., リプリー M., ミラーリッチ M., & ランブル M. 三宅なほみ (監訳), 益川弘如・望月俊男 (編訳) (2014). 21世紀型スキル 学びと評価の新たなかたち 北大路書房 pp21-76.)
- 中央教育審議会大学分科会制度・教育部会 (2008). 学士課程教育の構築に向けて (審議のまとめ) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/ (2015年10月1日確認)
- 中央教育審議会答申 (2011) 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/ (2015年10月1日確認)
- Griffin,P., Care, E., & McGaw, B. 2012 The Changing Role of Education and Schools In P.Griffin, B.McGaw, & E.Care(Eds), *Assessment and Teaching of 21st Century Skills*, Dordrecht, Springer., pp.1-17. (教育と学校の役割の変化 グリフィン P., ケア・B・マクゴー, B. 三宅なほみ (監訳), 益川弘如・望月俊男 (編訳) (2014) 21世紀型スキル 学びと評価の新たなかたち 北大路書房 pp1-20.)
- 稲垣佳世・波多野 諠余夫 1989 人はいかに学ぶか 日常的認知の世界 中公新書
- 岩井雪乃 (2010) ボランティア体験で学生は何を学ぶのか ～アフリカと自分をつなげる想像力～ 人間環境論集 10 (2) ,1-11.
- 加納輝尚・岡野大輔・河合 晋・手嶋慎介 (2014) ジェネリックスキルの育成の観点からみたインターンシップの取組に関する一考察 ～中部・北陸地域の高等教育機関におけるインターンシップおよびPBLの取り組み事例の比較を通して～ 富山短期大学紀要 49, 87-102.
- 河井 亨 (2012) 授業と授業外をつなぐ学生の学習ダイナミクスの研究 ―WAVOCプロジェクト参加学生へのインタビュー調査の分析から― 日本教育方法学会紀要 37,1-12.
- 河合塾 2011 Kawaijuku Report 今、大学教育に求められるジェネリック・スキル ―社会に通用する力をいかに評価・育成するか― Guideline, 11, 53-61.
- 経済産業省 社会人基礎力に関する研究会 (2006) 中間とりまとめ <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>(2015年10月1日確認)
- Mitchell, K. E., Levin, A. S., & Krumboltz, J. D. (1999) Planned happenstance: Constructing unexpected career opportunities. *Journal of Counseling and Development*, 77, 115-124.
- 高綱睦美 (2015) 高校生のキャリア発達に関する研究 ―6SC尺度、CARS尺度得点の学年・性別比較を中心として― 日本教育心理学会第57回大会 発表論文集 703.
- 高綱睦美・浦上昌則・杉本英晴・矢崎裕美子 (2014) Planned Happenstance理論を背景とした機会活用スキルの測定 ―6SC尺度作成の試み― 日本キャリア教育学会第36回研究大会発表論文集,

45-46.

- 山田剛史・森 朋子 (2010) 学生の視点から捉えた汎用的技能獲得における成課・成課外の役割 日本教育工学会論文誌 34 (1) 13-21.
- 山本秀樹 (2010) ジェネリックスキルの獲得に向けた大学教育プログラムの研究 ―海外サービラーニング(カンボジア)における実践から― 関西国際大学紀要 11, 47-55.
- 吉野恵子 (2007) 大学教育とジェネリックスキルの獲得 ―ジェネリックスキルのめぐる各国の動向と課題― 兵庫大学論集 12, 163-178.

appendix 6SC(6 Skills scale for Career)の各尺度項目

興味探索スキル

- 1 何の役に立つかわからないことでも、興味を感じたらやってみること
- 7 身の回りの出来事や自分の体験を組み込んで、現状の知識をさらにひろげること
- 13 自分がやってみたいことを教えてくれる場所や人を探すこと
- 19 新しい体験ができるチャンスを見つけ、積極的に かかわること
- 25 今の自分の関心にとどまらず、いろいろなものに関心を広げること

継続スキル

- 2 困難な状況でも粘り強く取り組むこと
- 8 苦勞するとわかっていることでも、やり通すと決心すること
- 14 嫌なことでも何とかやり遂げること
- 20 問題にぶつかった時、そこから逃げたいという気持ちを抑えること
- 26 面倒に思っても、途中で物事を投げ出さないこと

変化スキル

- 3 困難にぶつかったとき、新しい手段や方法を見つけること
- 9 普段のやり方でできない場合、やり方を工夫すること
- 15 物事をうまく進めるために、自分の考え方を変えること
- 21 自分のおかれている状況を変えたい時、その状況にうまく働きかけること
- 27 自分がより成長できる状況を作りだすこと

楽観的認識スキル

- 4 何かに取りかかる時、「自分次第できっとできる」と考えること
- 10 新たな挑戦をする時、「きっといつかは達成できる」と考えること
- 16 困難なことに直面した時、「この出来事には対処することができる」と自分に思わせること
- 22 どんな時でも前向きな気持ちを持ち続けること
- 28 現状がうまくいっていない時、「うまくいく方法は必ず見つかるはずだ」と考えること

開始スキル

- 5 やりたいことであれば、失敗する可能性があっても挑戦をはじめること
- 11 「悩んで動かないよりも、動き始める方が大事だ」と自分に思い込ませること
- 17 うまくいかどうかかわからなくても、とりあえずは始めること
- 23 何かをしようとするとき不安に感じることであっても、それに取り組むこと
- 29 経験のない新しいことであっても、取り組んでみる

人間関係

- 6 初めて出会った人から、自分が興味をもっている話を聞きだすこと
- 12 立場や考え方の違う人と積極的につながりを持つこと
- 18 親密さの程度にかかわらず、幅広く他者とのつながりを維持すること
- 24 知り合いが少ない会に気軽に参加すること
- 30 あまり親しくない人に、依頼やお願いをすること